

苗木城跡： 赤壁城伝説

江戸時代の天守閣の多くは、美観と防火のために白漆喰を塗っていた。しかし、苗木城は剥き出しの土壁の色から「赤壁城」と呼ばれた。現在、残存する壁はなく、当時の実際の姿を見ることはできない。

この名前には伝説がある。赤壁城の赤土の壁には、もともと白い漆喰が塗られていた。ある夜、激しい嵐が吹き荒れ、一晩中荒れ狂った。翌朝、城の住人が目を覚ますと、壁の白い漆喰が剥がれ落ち、その下に赤土が見えていた。その後、壁はさらに厚く塗り直され、再び白壁の城となった。しかし、黒雲が戻り、雷が鳴り響き、雨が城に打ちつけた。城のふもとの木曾川から龍が現れ、城に巻きつき、白い漆喰を爪で削り取った。龍が去った後、赤土の城壁はそのまま残すことになった。

実際には、遠山家の財政が逼迫して漆喰を塗る余裕がなかったことを隠すために、このような話が作られたのかもしれない。